



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活節第2主日 B年 (2021年4月11日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 4章 32－35節

第二朗読：使徒ヨハネの手紙一 5章 1－6節

福音朗読：ヨハネによる福音 20章 19－31節

テーマ：見ないで信じる人

三つの朗読から

今日の第一朗読のように初代教会の信者の生活の一端を知らせてくれる記述は2章42－47節にも見られます。今日の朗読箇所も同じような内容ですが、書かれた意図が少し違うようです。今日の朗読箇所のすぐ後にバルナバの話が続きます(36節)。これは32－35節を模範としたよい例の提示となります。反対にその後の5章1－11節は悪い例の提示となります。そして、最終的に初めて「教会」という表現が用いられます(11節)。使徒たちによる教会確立の述べようとする文脈の中に今日の朗読箇所はあるでしょう。それは、言葉づかいでわかりません。聖霊降臨の直後、ペトロは「イスラエルの人たち」(2章22節、3章12節)と呼びかけました。それが、イスラエルの「民」(3章12節、4章2節)と変わり、そして「信じた人々の群れ」(4章32節)、すなわち一つの集団へとなっています。最終的にその集団が「教会」となります(5章11節)。

第二朗読の『ヨハネの手紙一』は、紀元一世紀の終わり頃に成立しました。教会の伝承によれば福音記者ヨハネが、エフェソで書いたものとされています。特定の誰かに宛てて書かれた書簡ではなく、ある地方全体のキリスト者に読ませるために書かれたものです。当時、教会内に生じていた少し偏った考え方をする人々(「反キリスト」)に惑わされないようにとの配慮のもとに生まれていった書簡です。

福音朗読にある「平和があるように」(19節、21節、26節)に注目しましょう。ギリシア語ではエイレネーです。これは、ヘブライ語のシャロームです。元々の意味は「神が共にいる」です。

「平和があるように」を直訳すると「あなたがたに平和」です。「ありますように」ではなく「ある」の意味です。復活されたイエスそのものが平和だからです。

説教

イエスさまはトマスに向かって、手をのべて傷痕に触れるように促します。しかし、トマスは触れることなく「わたしの主、わたしの神よ」と告白します。そこで、イエスさまは「見ないのに信じる人は、幸いである」と戒めます。この戒めは、トマスだけでなく、わたしたちのようにイエスさまを肉眼で見ることのできない者にも向けられています。イエスさまを肉眼で見ることができなくても、弟子たちの証しを信じる者は「幸い」な者だからです。ですから、見る、触れるという体験よりも、言葉による伝聞が信仰の上で重要になります。簡単に言えば、言葉を信じることです。

復活した主を私たちは肉眼では見るできません。この地上で見えるものと言えば、ただ一つ、主の十字架だけです。十字架の苦しむキリストの向こう側に、神のいのち、復活のいのちを見据えるのです。そんな確固たる信仰を可能としてくれるのは言葉への信頼です。神の言葉を信じる、教会の言葉に頼る、他の信者さんたちの信仰の証言の言葉に耳を傾ける、といった具合に、言葉に頼ることを通じて「信じない人」から「信じる人」へと変えられていくのです。

「見ないのに信じる人は」とおっしゃったイエスさまはきっと分かっていたのでしょう。いずれ自分は御父のもとへと帰って行くことを。だから、これからは言葉を通じて神さまへの信頼が人々の中に伝わり、広がっていくことをトマスに伝えたかったのです。「見ないのに信じる人は、幸いである」をイエスさまからのお叱り、戒めと捉えることもできますが、語られる言葉を通じて、わたしはあなた方と一緒にいるんだよと言う優しいメッセージが込められたものとして理解することも可能です。こうして、「インマヌエルの神」は復活した主を通じて実現するのです。



「聖痕を受ける聖フランチェスコ」
ジョット・ディ・ボンドーネ